

未来へつなぐ vol. 8 | 桶本 毅 |

さいたま商工会議所 サービス業部会 部会長
桶本興業(株) 代表取締役社長現代社会のインフラとして
安心・安全の物流事業に尽くす

今やあらゆるビジネスを支える影の立役者でもある物流業。創業当時から、時代の流れにあわせられる対応力があつたから事業を継続できた、と振り返る桶本部会長に、柔軟経営の秘訣を伺いました。

現在、さいたま市を拠点とする総合物流会社である桶本興業(株)は、昭和40年に私の父が興した会社です。

我が家のルーツは和歌山だそうで、天保年間に東京の深川・木場にやってきて、紀井乃国屋という屋号にて桶屋を営んでいました。だから桶本という苗字なんですね。しかしその店は戦争で被災し、焼け出された家族は終戦後に縁を頼って埼玉の浦和に来了。父はそこから、東京の容器会社に勤めたのだそうです。

この「容器」というのは、要するに酒をはじめとする飲料瓶(一升瓶)のことで。当時の酒造りの本場はやはり関西。当然酒造業者も西に多かったため、首都圏で販売した酒瓶を買い付け、その後の相場を踏まえながら、関西の酒蔵へ運んでリサイクルする。そして関西から戻るときには、酒を仕入れる、というビジネスが成り立っていたわけです。

父はやがて独立し、昭和35年浦和の地に桶本容器(有)を設立。5年後には、容器の運搬だけでなく総合輸送業者となるべく、桶本興業運輸(有)を開設しました。

その後は、さいたまではおなじみのガスワンさんにご縁がで、湾岸エリアからブタンガスを運ぶ仕事を請けおう会社として桶本ガス輸送(株)を設立するなど、主にBtoBの運輸業として成長を続けてきました。

● 運べないモノはない 運べない場所もない ● 安全と安心の輸送サービスを追求して

2代目である私は、大学卒業後に入社した工作機械販売商社から、昭和63年に当社に戻ってきました。すぐに先代から、前述の桶本ガス輸送の責任者を任されまして、数年間ガスや燃油、医療用酸素の運輸業務に携わりました。ちなみにガス輸送会社発足当時(昭和40年12月)に使用していた車両は、埼玉県では第一号認定のタンクローリー車となります。

可燃物の輸送ですから取り扱いも難しかったのですが、経験豊かなドライバーさんたちに恵まれて、大きな事故などもなく仕事を完遂できたのは、とてもありがたいことでした。

その後はバッファロー便という商標で、特別積み合わせ事業にも進出するなど、時代に応じ



桶本 毅 (おけもと つよし)

昭和34年、さいたま市南区生まれ。国士舘大学卒業後、エシウムグループサンワ産業(株)に入社。工作機械の営業に従事する。昭和63年、桶本興業(株)入社。取締役就任。平成8年に代表取締役役に就任後、ロータリークラブや(公社)全日本トラック協会などの役職を歴任。平成29年よりさいたま商工会議所・サービス業部会長。

てお客様が求めるモノを、求められる場所に運ぶ、というビジネスを、ぶれずに続けています。

そのためにも大切にしているのが、ドライバーの育成とモラル教育。現在当社は100人を超えるドライバーを正規雇用していますが、みな技術・人格共に優れたセールスドライバーであることを誇りに思っています。

近年、業界は慢性的な人手不足であり、無理を強いられたドライバーが事故を起こすといった悲しいニュースもたびたび耳にします。こうした問題をなくすためにも、安定した雇用で暮らしを保証し、社員が安心して家族を養い、将来に夢を抱ける会社にしていくのが、経営者としての務めではないでしょうか。

当社では今後、優秀な人材確保のため、企業内保育所を開設し、親御さんが安心して働ける環境整備などを進めていく予定です。その姿を見て、お子様たちが「車、や「トラック」を好きになってくれたらな…とも、密かに期待しています。



● 事業と公共活動を通じ ● よりよい社会に貢献したい

私は学生時代からとても多趣味で、武道や登山、スキー、スキューバ、乗馬などを楽しんできました。こうした国内外での経験を通じて人脈が広がり、大きな世界を知ることができたのは、とても幸いなことでした。

社会人となってからは、商工会議所・青年会議所をはじめ、ロータリークラブや業界団体であるトラック協会など、様々な団体の運営に関わっていますが、若き日に広がった視野は、組織の中でもないかされています。

どの団体もコンプライアンス重視はもとより「業界を、地域を、社会をよりよくしよう」という前向きな願いが活動のテーマであり、その考えは当社の「流通事業を通じて、国家社会とお客様、社員に貢献する」という経営理念とも共通していると思うからです。

今や社会のインフラともいえる、物流ビジネスの重要性は、コロナ禍でも明らかになりました。その一翼を担う当社も、社員とご家族、地域の仲間を大切にしながら、誠実なビジネスで社会を支えてまいります。